

阿寒湖の芸能と舞台の歴史：伝統と創造

秋辺デボ

2024年9月24日

聞き手：谷地田未緒、笹村律子

構成：谷地田未緒

——：本日はよろしくお願いします。今回は、阿寒湖アイヌコタンで行われている創造的な舞台表現についてお話をお伺いさせていただきます。阿寒湖では昔から新しい舞台の創作が行われていますが、日本のアイヌ文化政策では、伝統的なものばかりが支援されているように思います。

秋辺：それはあなたの認識が甘い。ここでは新しいものを国のお金でやっているよ。アイヌ交付金¹⁾で。そこから間違っている。退場！（笑）

——：ああ20秒も持ちませんでした。出直して来ます。ありがとうございました。（笑）

秋辺：ご苦労さんでした。

——：気を取り直して……。

秋辺：（交付金）の初年度から毎年コタンの舞台にも予算がついている。例えばプロジェクションマッピング用の機材にも充てられているし、同じ年に古式舞踊の舞台もリニューアルした。そして今年は3年がかりで準備して、「満月のリムセ」という演目ができた。これも評判が良いんだ。今年の春から上演している。

——：それぞれの演目で、デボさんの役割はどのようなものでしたか？

秋辺：「ロストカムイ」は最初の相談までは自分がやった。その時に、東京2020オリンピック・パラリンピック（以下、オリパラ）の話がきて²⁾、アイヌの演目の総合監督を誰かやってくれと言う話だったので、じゃあ「ロストカムイ」の方は床（州生）君に任せるわと。彼はそれまであまり舞台の演出には関わっていなかったけれど、見事にやり遂げた。センスとか彼の考え方は、付き合いが長いからわかっていたし、できると思っていた。本人も勝算があったんだろう。

——：「満月のリムセ」は3年間の準備期間があったけれど、ロストカムイは1年で準備したと伺いました。

秋辺：アイヌ交付金は3年計画で使えるけれど、最初は観光・ビジネスに関するお金だったので1年で完成させなければならなかった。「KAMUY LUMINA」（以下、カムイルミナ）もスタートは同じころだった。「カムイルミナ」が「ボッケ遊歩道」の方で実施されることになったので、向こうで大々的にやるなら（阿寒湖アイヌ）コタンでもやらないとバランスが取れないということで、観光協会の大西会長³⁾がいろいろなつてを使って予算を獲得した。両方を担当した床君は大変だったと思う。ただその前に「ユーカラ劇」も役者として一緒にやっていたし、父親は舞台の演出家なので、ノウハウとセンスは伝わるものがある。

——：昔の記事に「ユーカラ劇」の演出を初めてデボさんが担当したことのことを書いていらっしゃるんですね⁴⁾。「ユーカラ劇」はいつ始まったんですか。

秋辺：その記事の3年前なので、2004年くらいか。これはそれまでの活動を基にして、組合の出し物として新しく作った。その3-40年前から既に別にあったのは阿寒湖アイヌ民族文化保存会（以下、保存会）の中の一組織の「ユーカラ座」があって、そこで作った「ユーカラ劇」というのがフランス行ったり全国回ったりして、いい舞台だった。

——：「ユーカラ座」の舞台も「ユーカラ劇」と呼ばれていたんですね。

秋辺：そう、どちらもユーカラ劇と言っているので混乱する。

——：記事に、「常設の劇場で演劇を見せるのだ」とありますが、この時の会場はどこだったんですか？

秋辺：いまある「阿寒湖アイヌシアターイコロ」（以下、シアターイコロ）ができたころには、もう「ユーカラ劇」はやっていない。そのころは「アイヌ文化伝統・創造館 オンネチセ」（以下オンネチセ）の舞台でやっていた。新しくシアターイコロができて舞台の構造が変わったので、またやりたいなと思っているうちに、プロジェクションマッピングという技術が世の中に出てきた。その当時は、建物に投影する事例しかなかった。舞台にプロジェクションを打ち込むというのは、ヨーロッパでいくつか事例があるくらい

で、ダンスとかアイヌの舞踊をプロジェクトンマッピングの中で実演するというのは事例がなかった。それで、まあお客さんにも受けるかどうかは、舞台自体の出来不出来に関わっているけど、やってみたいなと思った。シアターイコロができて3年目。イコロはステージを見下ろすタイプの劇場なので、床が使える。バックだけで水平にしか見えない舞台だとプロジェクトンが映えないので、うちはいけると思った。

——：なるほど。少し戻りますが、最近ウポボイでも「イオマンテ劇」の上演がありました⁵⁾。「イオマンテ劇」と「ユーカラ劇」は別ですか？

秋辺：ウポボイの公演は保存会が中心となったので、自分は関わっていないけれど、「ユーカラ劇」というジャンルの中に「イオマンテ劇」がある。もう一つは「アイヌラックル伝」。「アイヌラックル伝」は初演の時は「コタンの森」という名前だった。金成マツさんが伝承しているユーカラの中に「ポイヤウンベ」の話が出てくる。その半神半人の神様は、同じ神様なんだけど道東だと「アイヌラックル」と呼ばれている。それを金成マツの伝承から書き起こした高校の先生が居て、ある中学校の放送部が、それを基に声だけの放送演劇を作って全国で優勝した。釧路の丹葉節郎さんがそれを聞いて、ぜひこれを阿寒湖のアイヌコタンでやってはどうかと、娘婿であった千家盛雄さんに話を持ってきた。千家さんが舞台に明るかった床ヌブリさんにその話をしたら乗り気になって、その二人がメンバーを集めた。「ユーカラ」はアイヌ語だから読めないし、それだけだと分かりにくいけれど、舞台劇にしたらわかりやすいし自分たちも理解しやすいんじゃないかということで、やってみようということになった。だからまるっきり素人さ。そっから始まった。

——：丹葉節郎さんは釧路公民館の会長などをされていた方ですね。

秋辺：いろいろな役職をやっていた。ユネスコという組織を日本に最初に持ってきたために、早くから釧路にユネスコがあった。

——：それで「ユーカラ座」のパリ公演につながったのですか。

秋辺：フランスで第1回目のジャパンフェスティバル

をやるという情報ももらった。「ユーカラ座」の稽古がそこそこ始まっていたところ。そこで床ヌブリさんと千家盛雄さんが、ユネスコの日本の支部がその企画をすると聞いて尋ねて行った。そこでは当時、何百もの団体からの申込書が山積みになっていて、歌舞伎から能からいっぱいあった。そこで床さんたちは「自分たちは北海道のアイヌで、こういう神話を舞台にしているんだ」と説明したら、ユネスコの事務局長か何かをしていた服部先生⁶⁾という方が、その申請書を全部床に落として「ユーカラ劇にきまりだ」と言ってくれた。何か新しいものをやりたいと思っていたところに訳のわからない北海道の人たちが来て、情熱いっぱいに行ったから、何か感じるものがあつたんじゃないか。それで決まったんだ。その後、(政治家の)中川一郎先生のところに相談に行ったんだ。中川さんは阿寒湖の青年団が中心になって盛り上げて当選した人だから。そうしたら名刺の裏に「この人たちの話を聞いてあげてくれ」と一筆書いてくれた。その裏書の一言でみんな話を聞いてくれた。それで日本航空にお願いに行こうとして、まず中川先生の秘書に会えと言われて会ったのが鈴木宗男さん。当時パリには日本航空しか飛んでいなかったんで、鈴木さんが交渉してくれた。パリ公演のちょうど1週間後が「ホテルニッコー・ド・パリ」という日本航空が作った豪華なホテルの開業日だった。あと10日で開業という日にパリに着くということで、鈴木さんが、開業前のホテルにはモニター客が必要だからということで、無料で宿泊を提供してもらうよう交渉してくれた。飲食代はもちろん別に払ったけれど、そうでもしないととても資金が足りなかった。全部で23名くらい、10日間くらい滞在したが、公演費用も含めて3,300万円くらい費用が必要だと言われていた。資金が足りないという相談の時に、阿寒湖アイヌコタンの地主の前田光子さんが、この人とこの人に話してあるからお金の相談をしなさいと言って、人を遣わしてくれた。その資金集めをしてくれた一人が、当時町議会議員の一年目だった中島守一さんで、後で市町村合併前の最後の阿寒町長をやった。それで全道あちこち走り回ってくれて、資金を集めてくれた。

——：ユネスコが資金を出してくれたわけではなかったんですね。

秋辺：歌舞伎とか能も自前で手配をするらしいけれど、それにしても国からの支援がいろいろ入っている。また「我が県の踊り」だったら県がお金を出すじゃない。アイヌのものには国や県からは支援はない時代だった。ただ自分は中高生ぐらいだったから実際に行ったわけじゃないけど。

——：実際の公演は、セリフがない抽象的な舞台ですね。

秋辺：みんな舞台は素人だったから、セリフなんて言えなかったんだ。だから所作で表現をする演出を床さんが考えた。音は、最初にアイデアとなった学校の先生が録音したものがたくさんあってそれを使っていた。「ピリカピリカの歌」をクラシック音楽のようなアレンジでコーラスにしたものとか。すごく美しい音楽。でもその先生と一度トラブルになって、楽曲を使うなら著作権料を払って欲しいと言われた。当時は著作権のことなんかはよくわからなくて、交渉が決裂してしまった。同じ話は台本を書いた先生ともあって、その先生が書いた台本ではなく、当時の会長の四宅豊次郎が義父である山本多助エカシに頼んで、「ユーカラ劇」の題材となるユーカラを書き起こしてもらった。我々のユーカラ劇はその本が原点なので、「コタンの森」という題名からは離れていった。四宅さんはその議論の中で、「そういうことを言うならもう二度とアイヌのことを題材にするな。著作権の話をするのであれば、あなたたちは何をもとにしてその曲や台本を作ったのか。そんなこともわからないでアイヌのものを扱うんじゃない。」というようなことを言ったらしい。それで向こうも納得したらしい。著作権を主張しなかったアイヌのばあちゃんから話を聞いて、それを本にして自分がその著作権を主張するなんてもってのほかだと、40年も前にきちんと主張していた四宅さんはすごい人だと思う。

——：これはパリ公演の前ですか？

秋辺：直前だったと思う。それから壮行会を兼ねた舞台があって、それを自分は中学校3年の時に釧路まで見に行った。そのときに感動しちゃったのよ。テレビや映画は見てたけど、演劇っていうものは子供だから付き合いがなくて、それが

初めてだった。普段飲んだくれていたうちの親父とか暴れん坊のいところが、舞台立ったら演技すごい。ストーリーは全部アイヌの話だっていうからそれもまたびっくりして。それまでもう、アイヌなんか嫌だ、みんなろくでなしだし、いいとこなんもないと思ってたけど、その舞台見てこれはすごいと。俺は都合よく考えた。「俺はアイヌになる、これで和人に復讐してやる」と。文化で復讐しようと思ったんだ。

——：「ユーカラ劇」はデボさんにとって大きな出来事だったんですね。

秋辺：「ユーカラ劇」を見てなかったら、俺は東京で野垂れ死にしてるわ。浮浪者になって。要するに、プライドをもてない人間って生きていけないから。そこから舞台に関わるようになったし、差別も経済もアイヌの自立も、新しい法律とかいろいろあるけど、アイヌのアートとか、アイヌの表現としての文化がいちばんの武器になるとずっと信じているから。人権の話だけをしてもしょうがない。通じない。何にも変わらなかった。ということは人を感動させて納得させるには、もちろん人権とか成り立ちの話をするのも大事だけれど、より効果的に人に理解させるにはやっぱり映画とか舞台だよな、と思っている。

——：「モシリ詞曲舞踊団」(以下モシリ)もそうした表現の先駆者でしたね。デボさんはモシリにも関わっていらっしゃいましたが、どんな役割だったんですか？

秋辺：ボーカルとダンス。いやあ勉強になったよ。舞台の厳しさ、それから正確に何かをやり遂げるという訓練は「ユーカラ座」よりもモシリのほうが厳しかったね。しかもプロ中のプロのジャズの演奏者と一緒に舞台を作っていて、総合芸術として高いレベルにあったよね。俺の目線から言ったら、俺も含めて、あの時代のモシリのレベルには誰も届いていないと思うよ。

——：モシリの舞台がかつこよかったという話は、いろんな人からも聞いたことがあります。訓練になったというのは具体的にはどんな点でしょうか？

秋辺：役者とか演者としての訓練にもなったし、演出法とか。でも厳しさがいちばん大事な学びだったね。アイヌがアイヌとして甘えない。アイヌ

だからいいんだっていう考えは一切ない。舞台としてちゃんとやっているかどうかということが問われた。

——：デボさんが演出を受けたのもアトウイさんだったのでしょうか？

秋辺：そう、豊岡征則さん。俺はポニさんって呼んでたんだ。

——：モシリは東京も含めあちこちで公演していますよね。デボさんもそうした道外の公園にも出演されたんですか？

秋辺：行ったよ。アイヌ文化振興法⁷⁾ができる前夜みたいな時代だった時。あの時代にアイヌのことを大いにアピールしたのは「モシリ詞曲舞踊団」と、萱野茂先生と、貝澤正さんとかだったと思う。他に言う人は少なかった。表現する手段をまだ見つけてない時代だったと思うな。まだ手探りだったよな。

——：その10年前くらいに「アイヌ古式舞踊」が国の文化財指定を受けていますね。

秋辺：古式舞踊は表現の中にも使われるけれど今でも踊り方は何にも変えていない。阿寒の凄さは、先に古式舞踊をきっちりやったこと。目指すところはもちろん、「ユーカラ劇」とか、今の舞台にあるけれども。

——：ユーカラ座で初めて中学生の時に演劇を見たとき先ほどおっしゃっていましたが、古式舞踊は子供の頃から見ていましたか？

秋辺：俺が生まれる前からきっちりやっていた。それが基礎としてあるから「ユーカラ劇」ができたんだって先輩たちは言っていた。全道で二番目に早く文化保存会を作ったのが阿寒湖。いちばんは帯広。国から調査に来てた先生が、釧路の桂恋村で撮った踊りの映像を見て、感動したんだ⁸⁾。それがきっかけで、(釧路ではなく)阿寒湖に踊りを見に来たんだ。釧路ではもうあんまり踊ってなかったから。釧路で踊りを中心的にやっていたのが山本多助さんなんだけど、多助さんが阿寒湖に越してきちゃっていたもんだから。文化っていうのは、人について歩くものだから、人がいなくなればなくなる。それで阿寒湖の踊りを見て、最初は阿寒湖だけ文化財の候補として選ばれた⁹⁾。それで「選択書」というのが政府から送られてきた。そこから数年後に「本指定」があると。それを知った四宅さんが、

「そうじゃないんだ、阿寒湖だけでなく細々とも一生懸命やっているところがあるから見てくれ」って言ってあっちこっち連れて歩いて見せて、それで傾れ込むように8団体が指定された。この辺りの話も、「ユーカラ座」の設立の時の話も、床明さんや千家盛雄さんに聞いた話だから、その二人にはよく話を聞いたらいいよ。

——：はい、ぜひそうします。「ユーカラ座」の活動があって、「モシリ詞曲舞踊団」の活動があって、そしてアイヌ文化振興法の議論があって・・・冒頭にお話ししていた「ユーカラ劇」は、その後あたりですか。

秋辺：そう、観光振興策として始まったもので、演出をしてくれと言って任された。その前にもこの広場で、「イオマンテの火祭り」というイベントを始める時に、床ヌプリさんの「デボやれ」の一言で任されたことがある。床さんも癌を患って手術した後で、「次はおまえだ」ということで俺に白羽の矢が当たったわけだ。

——：デボさんが初めて演出した2007年のユーカラ劇は、いろいろ失敗もあったと、ご自身で記事に書かれていますね。

秋辺：最初は大失敗で、1年目はつまらない舞台になってしまった。大反省して2年目から全部変えた。1年目は、ユーカラを素直に舞台化した。でもユーカラって、同じことを繰り返すんだ。似たような登場人物が出てきたり——最初はどうぐりのカムイで、次はとんがったカムイで、とか。それを素直に舞台でやったらつまんないのよ。おんなじことを何回も舞台でくりかえすことになるから

——：この「ユーカラ劇」は「ユーカラ座」とは違ってセリフがあるんですよね？

秋辺：ある。それはぜひセリフを入れてやりたいと思って、アフレコでやった。録音したセリフを流して、口パクで。出演者は、合わせているとはわからないくらい上手に合わせていた。練習にはウォークマンを使って、録音した音声を流しながらひとりひとりセリフを吹きながらやった。お客さんは「ちゃんと役者さんが喋っていたよね」と思うくらいだった。最前列で真ん中のお客さんは、舞台上で喋っている声は聞こえないのになぜ両サイドのステレオから声が聞こえるのか、不思議に思うくらい。コタンの各商店

の若いのが舞台の役者をやっているから、舞台の後にお客さんが各お店に立ち寄ってその話をするので、2年目から「俺たち自分でセリフをやりたい」と言ってくれた。「やった」と思った。俺はそれを待ってた。それでモシリや、つきあいのあった「釧路演劇集団」¹⁰⁾の優秀な役者さんにきてもらって、セリフのやり方とか発声方法をみんながちゃんとできるように訓練した。2年目からは自分でセリフを言うようにして、中身も全部作り替えた。音楽はモシリのものを場面ごとに合わせて当てこんだ。5.1チャンネルのスピーカーで、音はすごくよかった。映画館と同じで、音が動くんだった。お客さんは音の渦に巻かれて、それに合わせて舞台が動くから感動ものだ。1年目の失敗は何かというと、お客さんがいうには、「あの舞台を見てもアイヌのことがさっぱりわからない」ということ。それはそうなんだ、アイヌのことを知ってるアイヌが伝承するユーカラだから、アイヌのことについて一言も説明がない。お客さんはアイヌのことをわかりたいんだけど、舞台では勝手にカムイとアイヌの話をやっている訳で、カムイのこともわからないしアイヌのこともわからない訳だから、それはつまらないよね。それで2年目からは、カムイとアイヌの話はしつつ、カムイとはなにか、アイヌとは何かっていうのをわかる台本に書き換えて、しかも冒険活劇にした。観光で楽しませようと思ってやったから、テキパキ場面転換した。これはうまくいった。これを見ればアイヌのこともわかる。2年目からすごくうけたよ。6-7年公演は続いた。大魔王の役は、うちの親父が最後までやっていた。ピッタリそのままの配役だった。やりたいこと全部やったよ。この演出には異なる意見も内部からあったけど、みんなの前で言ったのは、批判されるような舞台を作りたいということ。アイヌだから立派だって言われるような風潮に大反対だった。ちゃんと批判を受けて、それが次の年にいかされてどんどん良くなっていった。それがなかったら今の新しいのもできなかっただろうな。

——：この「イオマンテ劇」は、2004年から2010年くらいまでですね。会場は「オンネチセ」ですか？

秋辺：そう、骨組みが変わってないから舞台の大きさ

も今と同じ。舞台用の劇を作る時に、照明とかは設置し直した。市町村合併になる前の時代、阿寒アイヌ工芸組合（以下、組合）は利益があがっていたので、毎年数百万円、阿寒町に寄付していた。阿寒町はそれを基金にしてくれていて、その使用目的をアイヌ文化に関することに限るという条件にしていた。それをこの舞台を作る時の費用に当てた。スピーカーも照明も入れ替えて、5.1チャンネルの音響を作った。そういう複雑な音響は、今はパソコンで操作や制御ができるけれど当時はできなくて、東京のスタジオまで行かないと音の仕込みができなかった。音楽はモシリの音楽があったけれど、舞台の動きに合わせたSE（効果音）を入れたかったが、そんな音源はない。豊岡征則さんのお知り合いで、人気アニメの音源を作る方を紹介してもらった。そうやって音を作ったけど、5.1チャンネルできちんと動くかどうかは5.1チャンネルの設備でないと再現できない。床（ヌブリ）さんと俺が東京へ行ってスタジオを借り切って試した。日中だと8時間しか借りられないが、全然間に合わなくて、音も思った通り飛ばない。夕方スタジオが閉まる時、夜の間使わせてくれと交渉をして、徹夜で作った。これは初年度の舞台が開く前。

——：「イオマンテ劇」も、相当な試行錯誤が合って完成したんですね。そしてその後が人形劇ですね。

秋辺：そう、人形劇でセリフがすごく進化した。コタンの中にはいい役者もいて、人形劇をやる前から有名だった。「釧路演劇集団」にも呼ばれて。俺も（釧路演劇集団を）やったけど、2作品出てすぐ俺はやめた。俺はアイヌのことしかやってないんだけどさ、一般的な演劇に出たのは一番勉強になった。舞台役者として演技をするのと、「ユーカラ劇」みたいにアイヌのことだけをやっているのと全然違う。最初の「ユーカラ劇」は素人のまま、素のままでできた劇。それ以降のは、ちゃんと訓練を受けて、演劇も勉強して、目線のことから何から何までやらないとできない舞台になっていった。というかできることが増えたから表現力が増えていった。床（ヌブリ）さんはよく、「おまえらにセリフが言えたら俺はこんなに苦労しない」と言っていた。その通

りだと思う。

組合の商業演劇をやって一番よかったのは、みんなが演出家に従ってくれるようになったこと。最初は「ここでこうして」と言っても、「冗談じゃないお前のいうことなんか聞けるか」という人ばかりだった。それで俺は厳しくしようと思って、みんなに「今日から毎日怒鳴る」「演出のことを聞いてくれない人はクビにする」と宣言した。工芸組合は、組合員のための組合だから、みんなの相談次第では役割を下すこともできた。でも舞台はわがままではできないということを徹底して教えてきたのは「ユーカラ劇」だった。古式舞踊も子供の頃から見ていたけど、阿寒湖の女の人たちは恐ろしかった、厳しくて。「アイヌの踊りをなめるんじゃないよ」って言って、みんな泣いて帰るくらい。お金とって舞台をやっているからじゃない、もともと伝統が厳しかった。舞台って厳しいから、ちゃんとやろうっていったら、みんなついてきてくれた。だけど毎日泣いている人がいた。俺が怒ったのは長年やっているのに楽をしようとする癖がついてしまったひと。俺はこれを治さないと、コタンの舞台の将来はなくなってしまうと思っていた。「昔は阿寒の踊りはすごいと思ったけど…」と苦言を呈されるような時代もあった。俺の時代になって徹底してやったら、2-3人ベテランが「ついていけない、冗談じゃない」といって辞めていった。でもここで徹底してやったから、みんな舞台をちゃんと務める覚悟と訓練ができた。

人形劇の前に、「イオマンテの夜」というイベントも10年くらいやっていた。10年目に豊岡征則さんに演出を任せようということになった。豊岡さんを総合監督に、「モシリ詞曲舞踊団」と合体して、2ヶ月間毎日、劇場の裏にあった施設で公演をやった。そのときは、豊岡さんの演出にみんな従って舞台を作った。豊岡さんが俺を呼び出して「10年前は何を言ってもみんな聞いてくれなかったのに、お前どうやったんだ」と言われた。

怒鳴り続けた1ヶ月目、みんなにお給料払ったとき、舞台に出ているひとの旦那さんに「毎日恐ろしいって言って帰ってくるから、もう怒鳴らないでくれ」と言われた。俺は「あんたの

奥さんには一度も怒鳴ったことない、一生懸命、精一杯やってくれるから怒る必要ない」と言った。でも、自分じゃなくても、他の人を怒鳴っている時に泣いて萎縮してしまうと聞いたんだ。それで「わかった、次の日から一切どならない」と約束した。もう自分も癖になっていた。そのたった1ヶ月のせいで「デボは怒鳴る」というイメージが10年以上抜けなかった。そういうもんだ。でもそれがあって今のコタンの舞台がある。でも今は、怒鳴らなくてもいい舞台を作れる方法論を勉強した。スポーツのコーチングを勉強したんだ。人を指導するって同じことだから、舞台に生かせると思って。一番有効な手段として、相手の心を汲み取って、やる気にさせる方法論というのがあって、それを勉強したんだ。怒ってやらせるのは三流以下ということに気がついた。だから今は優しいよ。

——：東京オリンピック・パラリンピックで、アイヌ舞踊の総合監督¹¹⁾をなさった時も、同じようなリーダーシップの話をしてらっしゃいましたね。お互いの批判をしないことというのがルールの一つでした。

秋辺：オリパラのときの、「悪口をいうな」というルールは、文字にしたんだ。批評をしないでくれと。自分の意見と違うことを、表情で「あーあ」とみせるのもダメだと。それは言葉を発するのと同じだから。いろんな町・いろんな組織から集まってくるから、歌も振り付けも違う。一緒に踊ろうとした時に大変なので、きっと文句も出るだろうと、長いこと関わってきたのでわかった。だから、あの人のステップがこっちのステップと違う、ということも、誰かに聞こえたらそれは悪口で、批評じゃない。自分の気持ちを素直に出すのは良くないことだと覚悟して欲しいと言った。そしたら、ある街から来たすごく元気で前向きな人が、初日に、何も言わないし暗い感じだった。俺この人に何か悪いことしたかなと思って、練習終わったとその人にあって、「俺何か悪いこと言ったかい、あなた評判と違ってすごく暗い感じだったから心配なんだ、なんかあったら言って」と言ったら、紙を持ってきて、「これ、悪口言うなと書いてある。私これを言われたら喋れない」と。どういうことかという、アイヌは男も女もやるんだけど、褒

めたいときに「なにさその服」と言ったりする。頑張ってパーマでもかけたら「なにさそのパーマ、もっとまともなパーマないのかい」と言いながら、実は褒めてるということがある。これが分かり合える仲間だったらジョークなんだけど、わからない人が増えている時代なのにいまだに言ってしまう。それを会話のきっかけにしてる人今でも多いんだ。でもそれは通用しないんだって思ったんだろうな。どこの保存会に行っても、内部分裂の一番の原因は悪口。それがあるところの(オリパラの演目は)まとまらないと思ったから、そこから手をつけたのさ。それで次の日、急遽メニューを変更して、30数人のメンバーの中で、苦手そうなメンバー同士を近くにしておき、あるメンバーをみんなの前で褒めた。「あなたの踊りは本当に真剣でいい」と。その上で、サプリーダーは何度も手本を見せるのが仕事なので、息が上がらないように体力をつけたらもっと素敵になるんじゃないかとみんなの前で言った。こういう、欠点を褒めて直すというのを何度もやってみせた。メンバーは褒めるということをしなくて、いいなと思って「ふうん」という。悪い癖なんだこれが。本人はジョークとしてなんだけど、これをみんなにやめてもらった。そしたらみんな仲良くなったんだ。全員だよ。それで一致団結感ができたんだ。それで、「自分の保存会に帰ったらみんなと仲良くする方法見つけたから頑張る」というメンバーもいた。そのメンバーには、「その気持ちはいいけど、練習方法は真似するなよ。あなたの故郷にはあなたのふるさとのやり方があるんだから、それを変えちゃいけない」と言った。しつこく言ったのにやってしまった奴もいて、それであいつら(サプリーダー)は生意気だ、エリート意識だと言われるようになった。

——：1ヶ月怒鳴り続けていた頃と比べると、全く異なるアプローチですね。

秋辺：今は天使だよ(笑)。いまのコーチ論を学んでたら、あの時代も怒鳴らないでできたんじゃないかな。

——：話は戻りますが、「シアターイコロ」がオープンしたのと人形劇の公演が始まったのが同じ頃ですか？

秋辺：オープンして2年目からかな。その時の最初の

人形劇が、天の国から血の雨が降る物語というのがあって。それがクマ神様の(もともとの)話。内容を解説していったらクマ神様のドジ話だったので、「ふんだりけったりクマ神さま」という子供が見ても笑えるような、ちょっと女の人(神)にチャホヤされて、うっかりしてたら一生懸命集めたシャケを持っていかれてたという話にした。原作では3年も4年も女と遊んでいたという話。札幌の人形劇団が、ユーカラをもとにした人形劇をつくって¹²⁾、札幌大学の本田優子先生と(観光協会の)大西会長が見にいって、あれは面白いとなった。何がいいかといったら、人形がやると、生身の人間ができないことがいろいろできる。アイヌのユーカラって神様が空飛んだり地面もぐったり海の底いったり、とんでもないこといろいろする。それが人形だったらやりやすいし面白いよということで、じゃあ阿寒でもやろうという話になった。それで考えたのが、3、4年経ったら、自分たちの村だけで自走できるようになりたいということ。なので、俺は遠州まさきさんという外部の脚本家の下について一緒に脚本を勉強した。人形制作はコタンから澤井和彦くんが人形師にびっちりついて学んだ。舞台演出を、北村直樹さんという人が来たから、その人に床(州生)くんがくっついて演出を習った。あの人形劇でみんな進化したんだ。台詞回しもだけど、人形を扱いながら見えている人間も演技するって、ダブルですごく難しいんだ。でもきっちりセリフも言えるようになって、それまで苦手だった人もうまくやったよ。

——：私は札幌出身なんですけど、小さい頃にやまびこ座・こぐま座が中心になってつくった人形劇を見ていて、私の最初の演劇体験ってそこなんです。大人になってから、この劇場はすごく先進的なとりくみをしていたのだと学びました¹³⁾。

秋辺：当時、こぐま座も阿寒も同時に作品を作ることになったので、こぐま座に先行して先に作れと言った。同じ脚本で。それを見ながら俺たちも作った。向こうがやっていることをみて、「うちならあだな、こうだな」といって変更を加えてクマ神さまの舞台ができた。

——：お客さんの反応はどうでしたか？

秋辺：人形劇って、こどもの見るものだというイメージが日本では強い。僕らが目指したのは、ヨーロッパスタイルの大人向け舞台なんだけど、難しかった。

——：人形劇を2作作って、その次の独自のプロジェクトが「ロストカムイ」ですか。

秋辺：そう。「ロストカムイ」で一番驚いたのは、床（州生）くんのアイデアで、他所からダンサーを阿寒に連れてきたこと。あの発想には驚いた。すごえと思った。アイヌだけで舞台をつくるんだ、アイヌだけで演出するんだというのは10年前まであった。だけど人手不足やいろんなことがあって、工芸組合の事務所だってアイヌ以外の人も働くようになった。「阿寒の組合は、阿寒アイヌコタンのアイヌのために作ったのに、なんで日本人を使うんだって」みんな最初は言った。でも必要な人材がコタンにいないんだから、もっと視野を広げて、頼んで来てもらった。それは大英断だった。そのうちほら、いまでは舞台にもいろいろな国籍の人が出ている。今では「うちは国際劇場です」と言っている（笑）。

——：「ロストカムイ」に出演していたダンサーの山本樹生さんとKARINさんは、とうとう阿寒湖に移住されたらしいですね。

秋辺：阿寒湖を気に入って残ってくれて、いまこどもも三人もいる。最近ダンススタジオもオープンしたんだ。ストリートダンスの世界一を3年もとった人がきたんだからびっくりしたよ。まあそういうコラボレーションを超えた動きをうちの劇場で床くんがやってくれたというのはすごいなあと思った。いい仕事したよね。

——：最新作の「満月のリムセ」のポイントは何ですか。

秋辺：明るい舞台にしたこと。アイヌの舞台で明るい舞台って作りづらい。昔は説教モードの舞台も多かったし、アイヌの歌は無理やりピアノの鍵盤を乗せるとマイナーキーになるから、なんか暗くなる。それをなんとか明るくしようと苦労した。今回は交付金事業なので外部の業者も入ったけど、今回の舞台は俺が担当になったから、方針通りやってくれるようにした。

——：オリパラで助監督を務めていた日本舞踊の藤間信乃輔さんも舞台監督・脚本・演出として参加されていますね。

秋辺：藤間さんは俺もオリパラで気心がしれている

し、真面目な人だし、阿寒の舞台をどうしたいかということちゃんと話聞いて、そのとおり一生懸命全力を尽くしてやってくれる人だと知っていたから。尊敬もしているし。観客が何を求めているかっていう視線をきちんともっているひとと協議して仲良くやらないと舞台って作れない。だから和人社会と仲いいよ。昔は対立もよくしたけどね。

（了）

注

- 1) 「アイヌ政策推進交付金」のこと。2019年に施行された「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」（以下「アイヌ施策推進法」）に基づき、従来の文化振興や福祉政策に加え、地域振興、産業振興、観光振興等を含めた市町村の取組を支援するための交付金で、市町村が計画を作成するもの。（内閣官房アイヌ総合政策推進室：https://www.kantei.go.jp/jp/singi/ainusuishin/policy.html）
- 2) 2020年のオリパラでは、札幌市がマラソン・競歩の会場となり、大会公認プログラムとしてアイヌ舞踊パフォーマンスが実施された。秋辺さんはその総合監督を務めた
- 3) NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構理事長の大西雅之氏（役職は当時）
- 4) 秋辺日出夫「リレーコラム第34回天にとどく声」『ネットTAM：アートマネジメント総合情報サイト』（2007年9月20日）https://www.nettam.jp/column/34/?utm_source=internal&utm_medium=website&utm_campaign=author
- 5) 北海道新聞で「『イオマンテ』ウボボイで初上演 阿寒アイヌ民族文化保存会」と報道された（2023年12月17日）。
- 6) ユネスコ本部事務局長顧問を務めた服部英二氏か。日本ユネスコ協会連盟の記事によると、1973年よりバリ勤務、それ以前は在日日本大使館で教育・文化担当を務めていた。
- 7) 「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」（1997年施行）のこと。
- 8) 文化庁とともに文化財調査で訪れた本田安次のことと思われる。
- 9) 1975年に国が「記録作成などの措置を講ずべき無形の民俗資料」（のちに民俗文化財）として選定している。
- 10) 釧路市を拠点に1973（昭和48）年に結成された劇団。第27回1998（平成10）年に釧路郷土芸術賞を受賞（釧路教育芸術振興基金ウェブサイト https://news-kushiro.co.jp/kikin/intro30/）
- 11) 秋辺テボ（2022）、「特集2 北海道の物語 ～東京2020大会のレガシー～／文化の多様性を発信」『東京2020オリンピック・パラリンピック北海道』北海道環境生活部（https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ssk/legacyhokkaido/）
- 12) やまびこ座（1988年設立）・こぐま座（1976年設立）のウェブサイトによると、2009年（平成21年）1月にプロデュース人形劇（アイヌの超人伝説「空飛ぶ少年ボーヤウンベの冒険」、10月にプロデュース人形劇（アイヌ民話人形劇）「金のひしゃく銀のひしゃく」が上演されている（https://koguyama.jp/history/index.html）。
- 13) 参照：岩崎義純（2008）『こどもの劇場が街を変える 札幌市立劇場やまびこ座・こぐま座の軌跡』寿郎社。